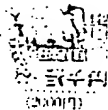


English translation in relevant parts of JP-A 50-81856

Title of the invention: A method for treating aloeswoods (called as kishimi in Japan) by preservation.

Claim: A method for treating aloeswoods (called as kishimi in Japan) by preservation, which comprises soaking cut ends of cut branches of the aloeswoods with an aqueous solution wherein a chlorella extract, a hydrophilic surfactant and an antibiotic substance coexist.



特 許 願

公開特許公報

昭和48年11月14日

特許庁長官 斎藤 英 雄 殿

1 発明の名称

しきみの保存処理法

2 発明者

住 所 北海道札幌市白石区白石本通一丁目北十四番地  
氏 名 阿 部 忠 雄 (他1名)

3 特許出願人

住 所 東京都千代田区西神田3丁目8番10号  
氏 名 雄 研 ビタミン油株式会社  
(代 理 者) 永 持 肇 之 進 (他1社)  
(国 籍)

4 代 理 人

東京都千代田区丸の内2丁目6番2号 丸の内八重洲ビル330号  
郵便番号100 電話(212) 3131 (代)  
(3667) 弁理士 谷 山 郎 (他3名)

方式 大衆

48-12858(1)

明 細 書

1. 発明の名称 しきみの保存処理法

2. 特許請求の範囲

クロレラエキス、親水性界面活性剤及び抗生物質の共存せる水溶液にしきみ切枝の切口を浸漬することを特徴とするしきみの保存処理法。

3. 発明の詳細な説明

本発明はしきみ切枝の保存法に関する。更に詳しくはクロレラエキス、親水性界面活性剤及び抗生物質の共存せる水溶液にしきみ切枝の切口を浸漬することによりしきみの寿命を長期間保つ保存処理法に関する。

しきみはモクレン科に属する常緑の植物で、本州中部以南の暖地に自生するが、一般に寺や墓地に植えられたり、生の枝を仏壇や墓に供えられる。

しきみの切枝は通常水を毎日とりかえても水くで1ヶ月位で落葉したり、観賞に耐えられなくなる。しかるに本発明に使用する水溶液にしきみの切枝の切口を浸漬することにより、しきみの寿命

①特開昭 50-81856

③公開日 昭50.(1975) 7. 2

②特願昭 48-128580

②出願日 昭48.(1973) 11. 5

審査請求 未請求 (全3頁)

庁内整理番号

7749 49

②日本分類

4 A D

⑤Int.Cl<sup>2</sup>

A01N 3/02

は数倍に伸び、少なくとも2ヶ月以上新鮮な状態に保つことができることを見出した。

また、しきみの切枝の切口を浸漬してから消毒地へ搬送する場合でも予め本発明の水溶液にしきみの切枝の切口を浸漬してから、梱包して搬送すると落葉や傷みが少ないという利点も見出された。

本発明に使用する水溶液中にクロレラエキス、親水性界面活性剤及び抗生物質を共存させたのは次の理由による。即ちクロレラエキス中には植物成長促進因子が存在し、植物ホルモンの作用により葉体を新鮮に保ち、かつ落葉を防ぐ作用を有する。また親水性界面活性剤は導管内の栄養分及び水の通りを良くする効果があり、かつクロレラエキス、抗生物質などの有効成分を均一に保つ効果を有する。更に抗生物質は切枝浸漬液中にバクテリアやカビの増殖するのを防くと同時にクロレラエキス成分の腐敗を防止し、切枝の切口や導管のつまりを防ぐ効果を有する。

これらの三成分が適度の濃度で存在するとき、始めて本発明の目的が達成される。

本発明で使用するクロレラエキ스는しきみ切枝に影響を与える食塩、硫酸などの添加していないものが好ましく、使用濃度は0.0001~1.0 wt%の範囲が良い。クロレラエキスを植物に応用した例はあるが、いずれも根子の発芽や根のある植物であり、切枝や切花に使用した公知文献は見当たらない。

親水性界面活性剤としてはHLBの高いカチオン、アニオン、ノニオンの何れでも使用できるが、安全性の高い脂肪酸脂肪酸エステル、ポリグリセリン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレングリセリン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル、高級アルコール脂肪酸エステル塩、などが好ましく、これらは1種或いは2種以上を適宜用いることができる。

使用濃度は水100ml当たり0.001~100ppmの範囲が良い。

抗生物質としてはグラム陽性菌及びグラム陰性菌などに効果を有する広範囲乃至は中範囲のものが好ましく、ストレプトマイシン、テトラサイク

(3)

上記組成の水溶液を調製し、実際に使用する時は800倍に希釈する。この希釈した水溶液を500ml容の花瓶に300ml入れ、対照として水の場合も同様に行つた。

この花瓶にはしきみの切枝の切口を各1本ずつ浸し、水或いは本発明の水溶液は2日毎にとり換えた。

試験は各区5本ずつ行ない、換水毎に状況を観察した。その結果水の場合の対照区では20日目頃より葉色が悪くなり1ヶ月後には落葉し始めたのに対し、本発明区は2ヶ月後も状態の変化はなく、新芽が出てきて好ましい状態であつた。

## 実施例 2

クロレラエキス(無塩、無糖)	0.45%
クロールテトラサイクリン	20 ppm
ポリグリセリンラウリン酸エステル	0.005%

(5)

リン酸、クロラムフェニコール、エリスロマイシン、カナマイシン、セフアロキサランなどで、これらは1種或いは2種以上を適宜用いることができる。使用濃度は水100ml当たり0.1~10000ppmの範囲が良い。

本発明で使用するしきみ切枝の浸漬水溶液は前述の濃度で用いるが、実際にはこの濃度の100~10000倍の濃厚溶液を予め調製しておき、使用する際に適宜希釈して用いると便利である。

本発明はしきみ切枝の保存法に関するが、類似の葉などの切枝は勿論生花に使用する切花や切枝にも利用することができる。

次に実施例をあけ本発明を説明する。

## 実施例 1

クロレラエキス(無塩、無糖)	1.0%
カナマイシン	100 ppm
ポリオキシソルビタンモノオレエート	0.02%

(4)

上記組成の水溶液を調製し、実際に使用する時は500倍に希釈する。この希釈した水溶液につき実施例1と同様、水を対照として試験を行つた結果、実施例1と全く同様の結果が得られた。

代理人 谷 山 輝 博

笑 浦

岸 田 正 信

新 部 興 信

(6)

## 5 添付書類の目録

(1) 明細書 1通

~~(2) 図面 1通~~(3) 委任状 2通 うち、河忠雄は  
追って補充致します

## 6 前記以外の発明者、特許出願人または代理人

(1) 発明者

北海道札幌市白石区菊水元町 6-1-1

萩 野 肇 司

(2) 特許出願人

北海道札幌市白石区白石本通1丁目北14番地

河 口 忠 雄

(3) 代理人

東京都千代田区丸の内2丁目6番2号 丸の内八重堂ビル330号

(6348) 弁護士 箕 浦



同所 (6754) 同 岸 田 正 行



同所 (6753) 同 新 部 興

